

長野県天龍村で、お茶の学校開催される。

NPO 法人日本食茶の会（会長 石川美智子）は、このほど、長野県上伊那郡天龍村の天竜小学校で、「お茶の学校」を開催した。

天龍村は、長野県の南端に位置し、愛知県と静岡県に隣接し、隣町の南信濃と並んで、長野県唯一のお茶の産地として知られている。天龍村へは、JR 豊橋駅から飯田線天竜峡行きに乗り、概ね3時間半弱、自動車だと中央自動車道・飯田山本インターから、天竜峡に出て、国道151号を天竜川沿いに南下、約1時間で天龍村に到着する。天龍村は、標高約300mから1,000mの山ふところに囲まれた起伏に富んだ立地に集落が点在しており、夏鳥として毎年5月初旬に村に渡来する村鳥「ぶっぼうそ」が出迎えてくれる、人情豊かで閑静な山村で、人口は現在1,700人余、最近では癒しを求めてこの秘境を訪れる観光客も多い。今回お茶の学校を開催するに当たっては、

長野県内で唯一の茶産地にあつて過疎化が進む中での茶業振興と将来の後継者確保、児童も対象とした総合学習の一環として、また、お茶を通して「おもてなし」「お茶と楽しむ」をテーマに茶産業の再興と産業の活性化、町興しにもつなげようと、NPO 法人日本食茶の会の増沢副理事長が中心となり、大平巖天龍村村長（長野県茶振興協議会会長）、中村天龍小学校副校長、村役場関係者、遠山美緒さん（有）天龍農林業公社、等の理解と協力により、お茶の学校が開催された。

今回は、天龍村から8名、隣町の南信濃から6名の、合計14名の参加があり、先ず、主催者を代表して、石川理事長から、「お茶を作って飲んで食べて健康になろう」と挨拶があり、続いて天龍村の村長で、長野県茶振興協議会の会長でもある大平巖村長から、歓迎とお茶の学校を開催する意義について挨拶があり、早速参加者は、お茶摘み体験に、学校近くの茶畑（有）天龍農林業公社

所有）まで徒歩にて移動し、増沢副理事長から色々なお茶の摘み方についてレクチャーを受け、今回は二芯二葉摘みで、無農薬の生葉を摘み取った。（写真1）



写真1 無農薬茶園にて一芯二葉摘みで茶摘み

後からは、増沢副理事長が持参した極上の普通煎茶、ウーロン茶、紅茶の試飲会が行われ、何故お茶の種類や製造方法で味や香りが異なるのか、分かりやすく説明がなされた。

南信濃村からの参加者の一人は、「普段、お茶には何となく接していたが、お茶がこんなに奥が深い飲み物だとは知らなかった、今日はお茶摘みから製造、試飲会と、お茶づくしの一日であったが、終日お茶に触れることができ、本日に勉強になり良かった、皆に今日のことを教えてあげたい」と参加して本当に良かったと感慨深げであった。（写真2）



写真2 手揉みに興味を覚えた子供達

最後に、協力いただいた天龍小学校の村副校長から、参加者同様、「お茶は日常茶飯事の如く、あまりにも身近な存在であったが、本日はお茶が持つ縁で貴重な体験に接

することが出来て非常に有意義であった」と挨拶があり、閉会した。

さて、ここで少し天龍村の茶業について紹介しておく。天龍村は現在30ヘクタールの茶園を有し、村内には2つの製茶工場（共同工場と農協の工場）がある。主に一番茶だけを、殆ど無農薬栽培で生産しており、山間地で、気象条件も厳しく、起伏のはげしい山腹に茶園が点在しており基盤整備にも限界がある。また、茶園管理も、高齢化が進み後継者不足と相まって、お茶の栽培は決して楽ではないが、この地域は、標高も高く、地域の気象条件を逆手に、無農薬栽培と、紅茶の生産に以前から取り組んでいる。

南信濃と天龍村は、最近でこそ発酵茶がブームになりつつあるが、前出の遠山美緒さん達が中心になり、農協と普及所、生産者が三位一体となり紅茶生産に取り組んだのは、今から10年前、全国でも、先駆的な地域で、当時の国立野菜茶業研究所、紅茶の専門家（スリランカ出身のアルツガメウダヤさん）の指導を仰ぎ、本場の紅茶づくりを学ぶためスリランカまで研修に出掛ける等、真剣に取り組む、南信濃、天龍村の二番茶を利

用して、紅茶生産に着手した。指導に当たったスリランカ人のウダヤさん曰く、この地域は又ワラエリヤに似ており、紅茶生産に適しているのではないかとということで、本格的に指導いただいた、今では、6トン内外生産されており、様々なチャネルで紹介されている。

そんなことが、長野県安曇野市に本社を構える「お茶元 みはら胡蝶庵」というお茶スライツ界の巨匠（株）丸三三原商店社長 三原 不二夫氏）の知るところとなり、天龍村の中井待地区に自園の茶畑を所有し、隣の農家の茶園も借り入れ、労働力の支援も行うなど、茶畑の管理を含め、高齢化が進むこの地域の茶業を支援しようと、生産商工が一体となった取り組みを提案し、南信濃で生産されている紅茶、天龍村の緑茶、お茶使ったスライツ等、地産地消を積極的に推進している。

今後は、天龍農林業公社とタイアップし、この地域で産出される様々な産品を、胡蝶庵のネットワークを通して紹介して行く計画も進んでいるようである。

（編集部）